

## 福沢諭吉『増訂華英通語』とハーバード版『華英通語』

平井一弘

はじめに

福沢諭吉は万延元(1860)年1月に、幕府遣米使節の護衛艦咸臨丸に乗り組みアメリカへ行った。この時に、清国人子卿の著した『華英通語』をサンフランシスコで購入した(『増訂華英通語』「凡例」)。「華英通語」は中国人商人向けの華英対訳英語・英会話学習書のようなものである。

福沢は同年5月に帰国したが、その年の8月には、『華英通語』の「横文字に仮名を付け」(『福沢全集緒言』)で、『増訂華英通語』として出版した。<sup>(1)</sup>「横文字に仮名を付け」とは、『華英通語』原本の英語にカタカナ発音表記をつけたことを指すのであろうが、原英語の訳語、訳文(福沢によると考える)にも、漢字は一切使われず、全て片仮名で書かれている。

さらに、福沢自身が、『増訂華英通語』は、横文字に仮名をつけたまでのことで、翻訳と呼べるような大層なものではないとの趣旨のことをいっている(『福沢全集緒言』)。これを読むと、原本である『華英通語』の全ての英語の語・句・文に仮名をつけたのである。また、『増訂華英通語』は翻訳と呼べるほど「高級な」仕事ではなく、簡単な片手間仕事であった。と福沢がいつているとの印象を持ちがちであろう。

福沢が英語を学習し始めて1年たつたばかりの万延元年に、しかも、その学習方法は小さな蘭英辞書と蘭英会話書を頼りとする(『福翁自伝』)だけであつたらしい福沢にとって、『増訂華英通語』は、翻訳の分量、英語の内容、著述の目的(日本人のための英語学習書であると共に外国人のための日本語学習書)と訳文の文体(俗文)からしても、簡単な片手間仕事であったと考えることは極めて難しいが、このことはすでに別稿で論じた<sup>(2)</sup>ので、ここでは問題とはしない。

小稿での問題は、福沢は原本『華英通語』の全ての英語の語・句・文に発音表記と訳を付けたのか、それとも、原本を一部「編集」した上で『増訂華英通語』を著したのか、である。福沢が翻訳の原本とした『華英通語』(以下、「原本」と称す)は未だ特定されていないようである。<sup>(3)</sup>

小稿は「編集」説に立つが、原本が特定されていない以上、編集を疑う根拠を示さなければならぬ。この疑いの根拠は二つあり、第一に、『増訂華英通語』の内部に矛盾が幾つかあることである。第二に、小稿で「ハーバード版」と呼ぶ『華英通語』と『増訂華英通語』の間はかなり大きな差異があることである。小稿の主要な目的は、第一の内部矛盾を指摘することにあるが、そこでしばしば言及されるはずの「ハーバード版」について、前もつ

て略述する。

慶応義塾福沢研究センターには、ハーバード大学イェンチェン研究所蔵『華英通語』のフォトコピーがある。このフォトコピー版(以下、「ハーバード版」)の『華英通語』は福沢の原本ではないとされている。

私は中国語を知らないし、書誌学の知識も皆無であるが、素人目にもハーバード版は原本ではないと思われる。なぜならば、それぞれの序文が異なる。『増訂華英通語』には「咸豊乙卯蒲節後二日」の日付けの序文「何紫庭序」があるが、ハーバード版には「咸豊庚申清明節渡養」付け「拙山人謹誌」とされた序文がある。「咸豊乙卯」は1855年、「咸豊庚申」は1860年である。もちろん序文の内容も異なる。

繰り返すが、小稿の目的は『増訂華英通語』の原本の特定に寄与することではなく、『増訂華英通語』の特徴の探求にある。しかし、ハーバード版が福沢の翻訳の原本ではないとしても、これを『増訂華英通語』の研究に何とか役立てられないものであろうか。ハーバード版と『増訂華英通語』を比較して、後者の特徴を何か見出だせないであろうか。

もし、福沢が原本を忠実に、あるいは、ほぼ忠実に翻訳したものが『増訂華英通語』だとすれば、原本、すなわち、『増訂華英通語』から福沢による「増訂」部分を除いたものとハーバード版との間の違いは、もし違いがあるとすれば、『華英通語』の異版間(例えば、1855年版と1860年版)の違いに過ぎなくなるのかもしれない。それでは差異をいくら発見しても『増訂華英通語』の研究にはあまり意味がないであろう。事実、ハーバード版表紙には「咸豊庚申重訂」とあるから、福沢の原本とハーバード版は異版であることは確かだろう。

したがって、これら両者を有意味に比較するためには、少なくとも二つの仮定が必要であろう。第一に、原本と『増訂華英通語』の間には「忠実な翻訳」と呼べるもの以上の変更があり、福沢は原本を「編集」したと疑い得る、との仮定である。福沢が加えた「増訂」の「増」は、英語のカタカナ発音と日本語訳を加えたことであろうが、「訂」は原本を「改訂」したことを意味しているのではなかろうか。

それでは福沢はどのような改訂を加えて原本を編集したのか。この問いに答えるためには原本が特定されなければならないが、それがなされていない以上、次の第二の仮定が有意味であろう。つまり、原本は、『増訂華英通語』(正確には、福沢の「増訂」分を除く部分)よりは、ハーバード版により「近い」ものである、との仮定である。例えば、原本の英単語、句、短文の数は、『増訂華英通語』に含まれているそれらの数より多く(すなわち、福沢の「編集」は、原本の縮小が主であった)、ハーバード版の数により近いのではなかろうか。

これらの仮定にしたがって、ハーバード版と『増訂華英通語』とを対比すると、福沢は原本を「編集」と呼べるぐらいに改訂したのではなかろうか、との推測が強化される。福沢が原本を多少とも編集したとすれば、この対比によって福沢の編集の意図や方針を調べる糸口ができるかもしれない。いずれにしても、以下に、『増訂華英通語』の内部矛盾と『増訂華英通語』と「ハーバード版」間の異同のいくつかをあげて、私の推測する「福沢編集説」の根

拠としたい。

## 1. 『増訂華英通語』の構成

初めに、以下の議論に必要な限りで、『増訂華英通語』の構成を一瞥しておく。まず、本文の前に「凡例」（「万延元年庚申仲秋」の日付けで福沢による）がある（『全集』69-71頁）。次に、序文（「何紫庭序」）が来る（同73頁）。次に「目録」が「目録如左」として置かれ（同74頁）、本文に入る前の最後に、恐らくは原本からそのまま引用された、漢字表記の発音に関する注意書きが続く（同75頁）。この注意書きはハーバード版のそれと同一である。<sup>(4)</sup>

本文は、冒頭のアルファベットの筆記体（大・小文字）1頁を除くと、大雑把にいて、三つの部分より構成されている。第一に、「天文類」「地理類」から始まり「房物類」で終わる合計37項目よりなる部分。この部分は『全集』で126.5頁。各項目（「類」）毎にいくつかの英単語（句・短文）を含み、原本の漢字訳と、漢字での発音表記が、恐らく、ほとんどそのままに残され、さらに、福沢による日本語訳とカタカナ発音表記が記されている（図1参照）。

第二に、「單字類」「二字類」から「七字類」「長句類」に至る8項目で、各項目の英・漢・日の表記は上と同様である。項目名は英語の語句、短文の漢字訳の字数による。例えば、「單字類」には「I or me」（「我」）、「Sour」（「酸」）が含まれる。「二字類」の例は「Future」（「将来」）「Afterwards」（「後來」）である（図2参照）。この部分全部で65.5頁。

図1 「天文類」冒頭部

<i>Mars.</i> 孛孛	火星 星	天文類	
<i>Saturn.</i> 刺 頓	土星 星	<i>Heaven.</i> 喘 塊	天
<i>Planet.</i> 嚴 蘭 鐵	行星 星	<i>Celestial sphere.</i> 施 呢 參 悅 時 味	天球

図2 「二字類」冒頭部

<i>Future.</i> 黎 括	將 來	二字類	
<i>Afterwards.</i> 鴨 子 打 哈 時	後 來	<i>I or us.</i> 威 知 獨 時	我 儕
<i>Before.</i> 察 科	以 前	<i>Ye.</i> 伊	尔 儕

最後の部分は「單式類」で、ここには簡単な帳簿の付け方が示されている。4頁。この部分は、わずかな誤植を除けば、福沢の原本(1855年)とハーバード版(1860年)は組版、内容とも同じである。両者の字体も類似している。

## 2. 『増訂華英通語』の内部矛盾

私が『増訂華英通語』は福沢による編集を経たものではないかとの疑問を持つに至った理由は、『増訂華英通語』の内部にいくつかの矛盾があるからである。第一に、「目録」と本文

の間に矛盾がある。この矛盾を二種類挙げる。

[1] 「目録」では、「職分類」は、「天文類」「地理類」「人倫類」に続いて四番目に置かれているが、本文中では「人倫類」と「職分類」の順序が入れ替わり、「職分類」は三番目である。すなわち、本文では「天文類」「地理類」「職分類」「人倫類」となる。

[2] 「目録」中の項目名(「何々類」)と本文中の項目名に差異がある。以下の各ペアで、前が「目録」、後が本文。

「通商類」と「通商貨類」	「房屋類」と「房室類」
「百工類」と「工匠類」	「各埠類」と「各埠名類」
「齷物類」と「字房物類」	「鬻類」と「房物類」

[1] はともかく [2] は「誤植」ではなさそうである。

第二の、『増訂華英通語』の内部矛盾は、本文内に見られる矛盾である。「目録」と同様に本文にも「單字類」から「七字類」までの7項目が挙げられている。本文中でそれらの項目のもとに記載されている英単語・句・短文の漢字訳の字数は「四字類」までは、少数の例外があるとはいえ、字数と項目名はほぼ合致している。例えば、先にみた「單字類」の「我」や「酸」、「二字類」の「将来」や「後來」。しかし、「五字類」「六字類」には例外がたくさん現れ、「七字類」に至ると例外はまた少なくなる。

[1] 具体的には、「五字類」の短文数30、内例外数19。「六字類」の短文数40、内例外数14。それに対して、「七字類」の短文数は71、その内例外数はわずかに4である。

「五字類」を例にとると、この項目の最初の文 “Is breakfast ready.” (『全集』244頁。英文はママ、以下同じ。)の漢字訳は「早膳預便否」で5字であるが、その次の文 “Will you take tiffin with us to day?” は「今日請你與我們食點心」と10字である。さらに次には8字文が2文、7字文が1文、6字文が4文と続き、ようやく5字文が4文現れるが、その後の文も字数は種々である。

同様に「六字類」を例にとると、「六字類」の冒頭の1文(『全集』248頁)は「勿再遲劑喇(Don't put any longer.)」と5文字である。他の文に、確かに6字文は相対的に多いが、それに限られない。同じ「六字類」の次ページ(249頁)には3字、4字、2字文が続いている。例えば、「莫催我(Don't hurry me)」、「装貨出口(Export goods.)」、「報信(To give intelligence.)」。さらに8字、9字文もある。

[2] 「七字類」の次に「長句類」が来る(『全集』263頁)。「長句類」は8文字以上の文からならなければならないはずである。確かに、「長句類」冒頭の文は「呢箇同箇箇一樣啫(This is just

like the other.)」と8字文である。しかし、その後7字文が14文続く。その後にも、7字から11字の文が混在している。「長句類」全59文中7字文は32。8字文は16。残りの11文のうち、5字文1、9字文7、10字文2、11字文1。つまり、「長句類」中の半分以上の文は「七字類」に分類することも可能である。

「五字類」「六字類」の例外の多さおよび「長句類」中の7字文の多さは、事が文字数の勘定という単純な問題であるだけに、理解に苦しむ。

もちろん、「目録」と本文の間の、また、本文内での矛盾は、『増訂華英通語』の原本の『華英通語』がそうなっているので、福沢はそのまま訳出した可能性がないわけではないが、この推測を可能とするためには、今度は、原本の中にあるはずの矛盾を説明しなければならないであろう。これを説明しようとするよりは、福沢が原本に何等かの手を加えた。つまり、『増訂華英通語』は原本の『華英通語』を何らかの形で福沢が編集したものである。との前提で、『増訂華英通語』と、その原本ではないが、現に見ることのできるハーバード版『華英通語』を対比して、福沢の編集の痕跡を探る方が興味がある。

### 3. ハーバード版『華英通語』と『増訂華英通語』の対比

ハーバード版と『増訂華英通語』を比べると、これらの内部矛盾のあるものは説明でき、別のものはやはり説明できないが、それでも、ハーバード版は『増訂華英通語』よりは原本に近いものであり、したがって、『増訂華英通語』を著すに当たって福沢が原本を編集したとの疑いはますます強くなる。

小稿では、福沢の編集によって生じたと思われる、ハーバード版『華英通語』と『増訂華英通語』間の比較的大きな差異を5点だけ指摘する。

[1] 両者の「目録」共に「目録左如」とされ、両者にはほぼ同じ項目が含まれているが<sup>(5)</sup>、項目を並べてある順序が大きく異なる。例えば、ハーバード版の目録では、「數目類」「時節類」がそれぞれ第1、第2の順序であるが、『増訂華英通語』の目録では「天文類」「地理類」が第1、第2の順序である。逆に、ハーバード版では、「天文類」「地理類」は第3、第4の順序で「數目類」「時節類」の直後におかれているが、『増訂華英通語』の目録では「數目類」「時節類」はそれぞれ8番目と9番目に置かれ、「天文類」「地理類」からは遠い。

他の例を挙げれば、ハーバード版「目録」では(数字は順位。類名の「」をはずす)、房屋類(5)、器用類(6)、首飾類(7)、房物類(8)、鬚物類(9)、工器類(10)であるが、『増訂華英通語』では、これらは、首飾類(13位)を除いて、37項目中全て25位以下であり、工器類、鬚類に至っては、それぞれ、36、37位と最下位である。

「目録」の順位が各項目のおおよその「重要度」を示すとすれば、『増訂華英通語』が相対的に重視する項目は人倫類、職分類、國寶類、五金類、玉石類、刑法類等である。それが相

対的に軽視(逆に、ハーバード版が重視)する項目は数目類、時節類、器用類、房屋類、百工類、齎物類、工器類、鬮類等である。『華英通語』は、福沢の原本にしてもハーバード版にしても、中国人商人向けの英会話書であるから、数目類、時節類と共に商売上の物品をより重視するのは当然である。それに対して、『増訂華英通語』は人倫類、職分類、刑法類の人事項目を重視しているようである。

両書の各項目の目録上の順位には、上記以外にも多くの差異がある。福沢の原本とハーバード版が単なる版の違いであるならば、この目録上の大きな差異は理解し難いように思われる。もし、ハーバード版が原本に近いとの仮定が正しければ、このことから福沢の編集の疑いが強くなることはもちろん、さらに、福沢の編集方針もある程度推測できる。例えば、「天文類」「地理類」を冒頭に置くことは当時の蘭学や英学の教科書に普通のことであり、<sup>(6)</sup> 福沢はこれにしたがったものか。また、福沢には、人事項目を重視する何等かの理由があったのか。

[2] すでにみたように、『増訂華英通語』の「目録」と本文中の項目名には不一致のものが6項目ある。これらのうち「房(内用)物類」を除く5項目は、『増訂華英通語』の「目録」とハーバード版の「目録」とで一致する。しかし、これらで一致しない「房物類」は『増訂華英通語』の本文とハーバード版の「目録」で一致している。

「房(内用)物類」を除き、『増訂華英通語』の「目録」とハーバード版の「目録」で5項目が一致していることは、ハーバード版がより原本に近いのではないかという仮定を裏付けるものではなかろうか。<sup>(7)</sup>

[3] これもすでに見たように、『増訂華英通語』の「單字類」から「四字類」までは、漢字訳の字数による分類との基準にほぼ合致しているのであるが、「五字類」と「六字類」は大きく矛盾して、「七字類」に至ると、また、ほぼ合致する。

ハーバード版には「單字類」「二字類」「三字類」「四字類」、そして、次に「長句類」とあり、『増訂華英通語』の目録、本文ともにある「五字類」「六字類」「七字類」はハーバード版にはない。これら3項目に分類されている短文は、ハーバード版では、すべて「長句類」に入られている。ハーバード版では、これらの漢字訳文は「長句類」であるから、字数に厳密である必要はない。このことから『増訂華英通語』の「五字類」「六字類」に5文字、6文字ではない漢字訳文が多く含まれている理由を、福沢「編集」説から説明できるかもしれない。このことをもうすこし詳しく見る。

ハーバード版の「長句類」は漢字4字から10数字の訳文となる英文を全部で240文(153-176丁、48頁)含み、大略、漢訳字数の多寡にしたがって英語の短文を並べてある。例えば、始めの153丁(2頁分)には漢字4文字訳の英短文7とそれ以上(6から7字)の訳字を持つ3文、計10文が置かれてあり、次の154丁には4文字訳字文6、それ以上の訳字を持つ4文、計10文が置かれて

いる。さらに、次の3丁(6頁分)には、冒頭に5文字訳字文1文(上に見た「早膳預便否」)が置かれ、他の文は5文字文11、6文字以上の訳文が18、計30文が置かれている。要するに、始めの4頁と次の6頁において、それぞれ、4漢字訳、5漢字訳文は相対的に多いだけであり、そうでない文もかなり混ざっている。

『増訂華英通語』の「五字類」は、実は、上に「次の3丁(6頁分)」と呼んだ部分と同一である(つまり、それ以前の2丁、4頁、20文は含まれていない)。したがって、「五字類」冒頭の1文「早膳預便否」だけは5文字文であるが、他はそれに限られない(図3参照)。「六字類」は冒頭の1文が5文字(「勿再遲劑喇」(Don't put any longer.))であり、その他の文に、確かに6字文は相対的に多いが、それに限られない。

「七字類」に例外の少ない理由は何であろうか。『増訂華英通語』の「七字類」の短文はハーバード版「長句類」の中ほど(169丁から終わり近くの174丁まで。終りは176丁。福沢は2丁4頁分を「省略」。)の14頁70文と内容がほぼ同一の英文であり、これらはほとんど全て漢字7字の訳文が与えられている。したがって、ハーバード版に「七字類」の項目はないが、『増訂華英通語』の「七字類」のほとんどの短文の字数は、うまい具合に、「七」で統一されたものである。

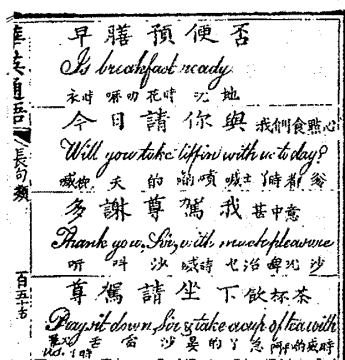
『増訂華英通語』の「長句類」に少し触れておく。ハーバード版「長句類」の7漢字文を中心とするセクションは上の14頁に加えて、さらに6頁続く。この6頁中(169丁の冒頭)に、突然、8文字の漢字訳文「呢箇同嚼箇一樣啫」(“This is just like the other.”)が1文だけ現れる。『増訂華英通語』の「長句類」はまさにこの1文から始まる。しかし、その次の文は、ハーバード版と『増訂華英通語』ともに、また7字文である。実際に、『増訂華英通語』の「長句類」中の文のほぼ6割は7字文である。つまり、福沢は「七字類」と「長句類」を項目では区別しながら、内容は項目名に合致しない。

ハーバード版で「四字類」と「長句類」を区別する意味は、「四字類」には、基本的に、4漢字訳文を持つ英文のみを分類して、「長句類」には、4字文も含むけれどもそれ以上の文字を持つ文をもたくさん含む、ということであろう。もし、福沢の原本である『華英通語』が、ハーバード版と同じくこの意味で分類されているとすれば、「五字類」「六字類」「七字類」の項目は必要なく、福沢が敢えてこれらの項目を立てたとすれば、上に見た字数上の矛盾は生ずる。

「福沢編集説」を正しいとすれば、福沢は原本にはない「五字類」「六字類」「七字類」を新項目として自分で立て、その「五字類」「六字類」には、たまたま原本の例外の多い部分を、また、「七字類」には例外の少ない部分を採用したことになる。そして、残りの部分を括った「長句類」には7文字文が大多数となった。

しかし、この推測にも問題はある。ハーバード版にも項目名と字数の合致しないものがあ

図3 「ハーバード版」長句類(155丁)一部



る(例えば、「長句類」冒頭の4字文)し、福沢が編集したとしても、もっと旨いやり方があったらと思うからである。

[4] ハーバード版には『増訂華英通語』に含まれていない英文が多くある。項目によっては、『増訂華英通語』にはハーバード版より一つ、二つの語・句・文が「省略」(厳密ではないが、こう呼ぶ)されている項目はかなりあるし、さらに、上に見た「五字類」20文の省略や、「長句類」最後の2丁、4頁、20文の省略のように、まとまって省略されている部分もいくつかある。ここでは、上記以外に多数の文がまとまって省略されている場合のみをいくつか述べる。

まず、『増訂華英通語』の「三字類」について。「三字類」最後の文“Don't make noise”(「咪咁嘈」)は、ハーバード版「三字類」の途中の文である。ハーバード版では、この後に、Wrap it up/Fill it up/Do it for me/等計39文が続く。これら39文は『増訂華英通語』では全て省略されている。

このような大量の文の省略例は「四字類」にもある。『増訂華英通語』とハーバード版ともに「四字類」は“These are not quite enough”(ともに「呢的唔够」)で終わる。ハーバード版はこの文で「四字類」を終り、次の文“He is not yet come back”(「佢未番来」153丁)から「長句類」が開始される。ところが、『増訂華英通語』の「四字類」は、ハーバード版の「佢未番来」以下の2丁、4頁、20文を省略して、その代わりに、21番目の文(すでに見た「早膳預便否」。ハーバード版では155丁の冒頭の文)から「五字類」を開始する。さらに、先にも触れたが、ハーバード版の「長句類」の最後の4頁20文も『増訂華英通語』では省略されている。つまり、ハーバード版「長句類」冒頭の4頁20文と最後の同じく4頁20文を、福沢は省略している。

ハーバード版の「長句類」は全部で48頁240文(153-176丁)である。「福沢編集説」にしたがえば、福沢はこれらを「五字類」(30文)、「六字類」(40文)、「七字類」(71文)、「長句類」(59文)に分け(合計200文)、残り40文(「長句類」冒頭と末尾で、それぞれ、20文ずつ)を何らかの理由で省略したとも考えられよう。

[5] ハーバード版に含まれない語句が『増訂華英通語』に含まれている場合がある。例えば「時節類」の十二支である。ハーバード版「時節類」の第一番目の語「正月」(“January”)から第60番目の語「中夜」(“Midnight”)までは、『増訂華英通語』の第1から第60に同じである。その後が両者間で異なる。

ハーバード版はその後に「時」に関する16語が置かれている。それに対し、『増訂華英通語』は61番目から十二支(A rat—A boar)、さらにその後に、四季(Spring season—Winter season)と、別単語であるが、語数は同じく16語が置かれている。繰り返すが、ハーバード版に十二支はなく、この箇所には四季はない。

『増訂華英通語』では、四季は同じ「時節類」の別な箇所(上に触れたハーバード版と同じ



60語中。ただし、ここには“season”なる語は無い。)にも置かれているから、四季を表す4語は、同一事項中(「時節類」)での重複である。十二支にしても四季の重複にしても、福沢の原本にないとは断定できないことは当然であるが、福沢がこれらを入れて編集したと考えたほうが面白かるう。

おわりに

福沢は『華英通語』のある版を原本として『増訂華英通語』を著したことは確かであるが、この原本は特定されていない。

『増訂華英通語』の「目録」と本文の間に、また、本文中の項目名とその内容の間にもいくつかの矛盾がある。前者の矛盾は、例えば、項目名の違いや、順序の違いである。後者の矛盾は、例えば、「五字類」30文のうち5字の漢字訳ではない短文が19文もあることである。このことは福沢が原本に改訂を加えて編集した可能性を示唆する。

福沢研究センター所蔵の photocopy 版の『華英通語』(ハーバード版)が『増訂華英通語』の原本ではないことは確かであろう。しかし、小稿では、両者を単なる異版と見做さずに、むしろ互いに近似しているのではないかと仮定して、『増訂華英通語』とこのハーバード版を比較した。そして、両者間のかかなり大きな差異を5点に亘って指摘した。もちろん、これらの差異は福沢が原本を編集した結果によるのか、あるいは、福沢の原本とハーバード版の差異によるものか、そのいずれかは原本が確定されるまでは解らない。

しかし、これらの差異によって『増訂華英通語』の内部矛盾の一部はかなりな程度まで説明される。このことから、福沢の原本とハーバード版は近似している、つまり、福沢の原本は、『増訂華英通語』よりハーバード版のほうにより近く、したがって、『増訂華英通語』は原本に忠実、あるいは、ほぼ忠実な翻訳であるよりは、福沢による原本の編集を経たものであると考えることもできるようだ。少なくとも、このように考えた方が興味深い。なぜならば、次には、福沢の編集方針を調べたくなるからである。

註

- (1)『増訂華英通語』『福沢諭吉全集』第一巻、岩波書店。
- (2)和田博徳「『増訂華英通語』の原本」『三色旗』第169号、昭和37年4月1日、および、可児弘明「華英通語スタイルの辞書」『福沢手帳』昭和60年12月。ともにかなり古い記録であるが、今日でも『増訂華英通語』の原本が特定されたとは聞かない。
- (3)構成、カタカナ発音表記および翻訳文の詳細は以下を参照。  
平井一弘「『増訂華英通語』の「音訳」と「義訳」」『大妻女子大学紀要(文系)』第30号、1999年3月、65-105頁、および、同「福沢諭吉『増訂華英通語』の俗語訳文」『大妻レビュー』(大妻女子大学英文学会)第32号、1999、139-158頁。

(4)この部分は、わずかの「誤植」を除いて、ハーバード版と内容、版組とも同じである。また、この部分は、恐らく、原本(1855年版)とハーバード版(1860年版)の間に原則的な違いはないことを推測させる。また、『増訂華英通語』「単式類」の帳簿例とハーバード版の帳簿例ともに1855年1月と2月の日付けで同一内容であることも同様な推測を許す。

(5)ハーバード版と『増訂華英通語』の「目録」の項目名間の異同。

ハーバード版	『増訂華英通語』
「房物類」	「房内類」
「紬緞布疋類」	「紬緞類」と「布疋類」の2項目に分離
なし	「粧扮類」
なし	「五字類」
なし	「六字類」
なし	「七字類」

(6)杉本つとむ『日本英語文化史の研究』八坂書房、1985、252-253頁。

(7)このことを次の表にまとめる。

『増訂華英通語』		ハーバード版
目録	本文	目録
「通商類」	「通商貨類」	「通商類」
「房屋類」	「房室類」	「房屋類」
「百工類」	「工匠類」	「百工類」
「各埠類」	「各埠名類」	「各埠類」
「寫字房什物類」	「字房物類」	「寫字房什物類」
「房内用物類」	「房物類」	「房物類」